慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1930年代女スパイ映画：『間諜X27』と『マタ・ハリ』にみるハニー・トラップの効用
Sub Title	Female spy films of the 1930s: the effectiveness of the "Honey Trap" in Dishonored and Mata Hari
Author	清水, 純子(Shimizu, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.64 (2014. 3) ,p.35- 54
JaLC DOI	
Abstract	"Spy" is a person whose job involves secretly gathering and reporting information about another country, organization, group, or enemies without the consent of the information-holders. Espionage is a set of clandestine and constitutional activities carried out for government or commercial purposes. Yet, as a matter of course, spying is illegal and is punishable by law. Thus, espionage is almost always accompanied by danger; it is unavoidable that some risks will be run in this kind of work. In a word, spying is a mission that may jeopardize one's life. The duties of a spy are required most in wartime. During the 20th century, when many wars occurred, there was much demand for spying and espionage: the governments of many countries needed able spies, especially for military purposes. In the film world, spy films have always been quite popular because of their entertaining qualities: they contain thrilling action, suspense, and the seduction of beautiful women. Among countless spy films, the most popular is the 007 series, which premiered in 1964. 007 focuses on a British gentleman spy called James Bond. Although it is difficult to find female spy movies that can rank with the 007 series, the classic Mata Hari might just be a match for 007. It is said that beauty and charm are the merits of the female spy, while the man she seeks is at the center of power and holds confidential information. Through the so-called "honey trap"—the use of a seductive woman to tempt a man into passing highly classified information to her government or syndicate—female spies play an active role in the 1930s film world. Among several 1930s female spy films, this paper focuses on Dishonored and Mata Hari. I will examine the universal themes that these two movies encompass: the anxiety of excessive information management; concealment through the power of the government; and the importance of personal dignity, rights, and happiness.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20140331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1930年代女スパイ映画
——『間諜X27』と『マタ・ハリ』にみる ハニー・トラップの効用

清　水　純　子

序

J. バーナード・ハットン（J. Bernard Hutton）は，スパイの機能とは，まず第一に，ひそかに敵方の情報を獲得して，味方側に流すことにある，スパイが情報源に接近するのには，「情報」を握っている人々の信頼を得て，「浸透」することが必要である，深く「浸透」するスパイのことを「プラント」と呼び，この古典的形体はトロイの木馬に見られる（ハットン 173）という。スパイに志願するのには四つの動機があり，その頭文字を集めるとMICE（ネズミ）になる。Mは金（Money），Iはイデオロギー（Ideology），Cはコンプロマイズ（Compromise），つまり名声や信用を危険にさらされたためやむなくスパイを引き受ける場合，Eは，エゴ（自尊心，Ego），つまりおだてられて自尊心をくすぐられて情報を提供する場合である（海野弘 12–13）。スパイは歴史で二番目に古い商売であり（一番目は売春），スパイが最も必要とされるのは戦時である。20世紀という時代は制度化され，組織化されたスパイを必要とした（海野 15–16）。海野は，スパイは本来影の秘密の活動家であって，見えない存在なのだから失敗して姿をあらわしたスパイについてのみ人々は知ることができるのだ，「したがって，スパイの物語は，間違いをし，失敗したスパイの物語なのであり，それ故に人

間的興味をそそるのだ」(16) という逆説的事実を指摘する。本論が扱う映画『間諜 X27』(*Dishonored*) と映画『マタ・ハリ』(*Mata Hari*) の時代背景 1917 年は，第一次大戦の最中であり，秘密の外交と各国間の秘密協定が暗躍した時代である。「外交」は二つ折りの密書なので，その秘密を覗くスパイの時代の到来である。「スパイの時代はマスコミの時代でもある。大衆紙は一つの権力と見なされるようになり，政府もそれを利用し，政府高官とジャーナリストが親しくなり，新聞は巧妙な漏洩ルートとして使われた。(中略) 新聞記者がスクープを狙い，秘密をのぞこうとするように，政府もよその国の秘密をのぞこうとした」(海野 89)。各国間のスパイ活動は熾烈をきわめ，第一次大戦を招いたのは，秘密外交によって国家間の信頼がゆらいだためという批判が起こった (海野 89–90)。『間諜 X27』と『マタ・ハリ』が作られた 1931 年から 1932 年は，第一次世界大戦の傷痕も癒えていないのに大恐慌を迎え，さらに悲惨な第二次大戦突入へと足踏み状態の剣呑な時代だった。

スパイがよく使う手法として窃盗や盗撮と並んで「色仕掛け」つまり「ハニー・トラップ」(honey trap) がある。ハニー・トラップとは，狙っている情報を持つ組織の職員に，異性の諜報員が近づき，恋愛感情を利用して情報を得ることを目指す比較的危険の少ないものをさす。この手法を使用するためには，性的誘惑を仕掛ける諜報部員の異性としての人間的あるいは性的魅力，端的にいえばセックス・アピールに多くを負っている。そのために，性的挑発に乗りやすい性である男性をターゲットにして女性諜報部員が利用することが多いとされる。本稿では，大恐慌の最中にあり，ナチス政権の台頭を迎えた，経済的，政治的，軍事的情勢において不安定な 1930 年代のアメリカで制作された第一次世界大戦を時代背景にもつ代表的な女スパイ映画『間諜 X27』と『マタ・ハリ』を論じ，比較検討して当時の世相の一端に触れる。

スパイ映画は，手に汗を握るサスペンスとアクションに加えて妖艶な美女が次々と登場するので常に人気があり，無数の作品が存在する。スパイ

図１　実在のマタ・ハリ　妖艶でエキゾチックな衣装

図２　美貌のマタ・ハリ

映画で有名なものは，アルフレッド・ヒッチコック（Alfred Hitchcock）監督の『39 夜』（*The 39 Steps*, 1935），『間諜最後の日』（*The Secret Agent*, 1936），『サボタージュ』（*Sabotage*, 1936）に始まり，『007 ジェームズ・ボンド』（*007 James Bond* シリーズ，1962 ～現在）に至って不動の人気を確保する。特に『007』シリーズは，半世紀以上に渡って 6 人のボンド役者に引き継がれ，現在も映画界のドル箱の立場を堅持している。これらの男性スパイ主役の映画に匹敵する女性が主役の筆頭は，マタ・ハリにまつわる映画である。マタ・ハリに関する映画は，他にはマグダ・ソーニャ（Magda Sonja）主演のドイツのサイレント映画『マタ・ハリ』（*Mata Hari, the Scarlet Dancer*, 1927），フランスのジャンヌ・モロー（Jeanne Moreau）主演の『マタ・ハリ』（*Mata Hari*, 1964），シルヴィア・クリステル（Sylvia Kristel）主演の『魔性の女スパイ』（*Mata Hari,* 1985）が制作されているが，『間諜 X27』と『マタ・ハリ』が女スパイ映画の元祖的存在である。女スパイと同格の意味を持つマタ・ハリは今や古典的存在だが，美貌と色気によって要職にある男性に近づき，情報を引出して活躍するというパターンは，『唇からナイフ』（*Modesty Blaise*, 1966），『ブラック・ブック』（*Black Book*, 2006），『シャーロット・グレイ』（*Charlotte Gray*, 2001），『ソルト』（*Salt*, 2010）に引き継がれる。

『間諜 X27』と『マタ・ハリ』は時代背景を第一次世界大戦時に置き，1930 年代に制作されているが過去の遺物にとどまらない。本稿では，二つの映画が 21 世紀に生きる我々にとっても必見であることを時代の状況に訴える映画のメッセージの普遍性という観点から検証する。

1. 『間諜 X27』――境界線上の女

『間諜 X27』（1931）は，スパイ映画の傑作である以上に，ボーダレスの（境界線を越えた）愛を描いた感動的な反戦映画である。制作は 1930 年代だが，時代は第一次大戦最中の 1915 年秋，場所はオーストリアのウィーンに設定される。土砂降りの雨が降りしきる中，ガス代が払えなくて自殺した 3 人目の娼婦の裏小路での出棺を見送る群衆の中に，黒いレースのベ

ールを被ったひときわ美しい女がいる。この妖艶な美女は，「あんたもいずれあの子と同じことになるよ」といわれると「私は生きることを恐れないわ。死ぬことも恐れていないわ」と傲然と言い放つ。

娼婦メアリ（Mary：マレーネ・ディートリッヒ Marlene Dietrich）は，二つの相対する領域を行き来する「境界線上の女」である。メアリは，大尉であった夫の戦死後，娼婦になっている。メアリは昼間は堂々と大手を振って歩けるエリート軍人の未亡人と夜間は闇の商売の娼婦という二つの社会的に明暗を分かつ立場，尊敬と軽蔑の両極端の境遇に引き裂かれて生きる。正反対の矛盾したものを抱えるメアリは，生も死も同等に訪れるべき運命あるいは来客として特別に区別することはなく，肯定も否定もすることもしない。

メアリの「死を恐れない」その美しい顔には，死神に魅せられ，死神を自ら進んでおびきよせようとする頽廃の表情が見られる。黒い喪服に身を包み，黒いレースの下から透けて見える目と唇をうっとりと放心したように半開きにして「死は怖くない」というメアリは，死に神に言い寄っている。メアリが死と親愛関係にあることは，いつも一緒にいる仲間が美しい黒猫だということに表される。欧米では，黒猫は「魔女の召使」であり，不吉なものを象徴する。メアリは黒猫を「幸運のしるし」というが，黒猫は不吉なことが前途に待ち受けていることを暗示する。X27 と黒猫がパラレルの存在であることは，スパイになったディートリッヒの目が猫の目のように光り，くるくる回りだすこと，猫を抱いた X27 の目と抱かれた黒猫の目が相似形に映っている画面からわかる。第一次大戦最中のオーストリアでは，死は身近な存在であった。おびただしい数の戦死者の葬列を見送るウィーン市全体に死臭が漂っていたからである。メアリの虚無的な退廃的美貌には，戦争によって病弊した，なげやりな世相が反映されている。

娼婦メアリは，映画の冒頭では祖国オーストリアに忠実な愛国者の殻をまとっている。死を恐れない度胸，祖国への愛国心，大胆で機転の利く才

覚を買われたメアリは，MICE（Money, Ideology, Compromise, Ego）を備えた完璧なスパイ間諜 X27 として祖国オーストリアのためにロシアの情報部員を罠にかけて，捕えることを任命される。スパイとして新たなアイデンティティー間諜 X27 を得たメアリは，本格的な「境界線上の女」に生まれ変わる。見かけはオーストリアの一娼婦だが，実はオーストリアの秘密諜報部員，そして時と場合に応じて違う仮面を被る。メアリは，女の武器を最大限に利用することが求められながら女にとどまらず，屈強な男を引きいれ騙して屈服させなければならない。任務遂行のためにメアリは時と場合に応じて，生にも死にも進んで身をまかせる女になる。

オーストリア軍部情報局にとって好都合に見えたメアリの二重性と境界線上の女である特性は，計算違いの結果を生む。熱烈な愛国者であり，有能なスパイであったはずの間諜 X27 は，ロシアのスパイ将校クラノウ大佐（Colonel Kranau：ヴィクター・マクラグレン Victor McLaglen）こと H14 に恋し，あっさりと祖国オーストリアの利益を裏切ってこのロシアの重要人物を逃してしまう。「愛国者として死ぬことを望みます」と宣誓した間諜 X27 だが，進んで身をまかせたロシアのスパイ H14 の逃亡のために国を裏切り，銃殺刑に処せられる。間諜 X27 から一人の女メアリに戻ったヒロインが選んだのは，愛国者としての栄光の生ではなく，売国奴にして売女の死である。メアリは，生と死の危うい綱渡りの末に敵国の美男スパイへの愛のために自分の命を捨てて死を選んだのである。

観客を感動させる見せ場は，メアリの銃殺シーンである。祖国を裏切った罪を問われる X27 は，「愛したからでしょう。私はそんなに優秀なスパイではありませんから」とさらりという。始めの方の画面に「X27 は歴史に名を残す名スパイになっていただろう，もし彼女が女でなかったならば」という活字が現れる。X27 を尋問した軍部の高官は，「数時間密会しただけの男を本気で愛するとは，娼婦の愛だ」と蔑むように言い捨てるが，高官は間違っている。「娼婦の愛」ならば，数時間ベッドを共にしただけの男に命がけの恋をするはずはないからである。娼婦は愛したふり，つま

り愛によって満ち足りた演技を期待されるが，本気で相手に惚れこんでは商売にならない。X27 は，国益よりも自分の欲望に忠実であったためスパイとして落第したが，娼婦としても男に惚れたので失格である。しかし観客は，ヒロインのその失敗の原因になった人間らしさ，どのような境遇にあっても女であることを失わない自意識と誇りの高さに魅せられる。女性観客はディートリッヒのようにふるまってみたいとあこがれ，男性観客は一度でいいからあんな女に本気で惚れられてみたいと願う。

今日的視点では，間諜 X27 のとった行動は「女だったから」でもなければ，「娼婦の愛だったから」でもない。ヒロインは，愛の力を得て，それまで「境界線上の女」として生きてきたどっちつかずの自分に終止符を打ったのである。死刑宣告を受けた時の X27 の表情は，「私は生きることを恐れないわ。死ぬことも恐れていないわ」と眼と唇を半開きにして，うっとりと死神にモーションをかけるかのような娼婦メアリの顔に逆戻りしている。軍法会議にかけられ，独房で死を待つ X27 が迷いを見せず，毅然として爽やかなのは，自ら死神の懐に飛びこむ決断を下したからである。X27 は，戦争という狂気，死の充満する世界の中で死に神に死ぬ前から侵食されていた。独房でお気に入りのピアノを弾き，銃殺の時刻が来ると娼婦としての彼女の制服に着替え，鏡の代わりに差し出されたサーベルで姿を整える。目隠しを拒み，その目隠しで泣いている若い兵士の涙をぬぐってやる余裕，立ち並ぶ銃の前で娼婦であることを確認するかのように人前でルージュを塗り，ストッキングを直す一人の女にかえった姿，最後に十字を切り，恍惚となった笑みを浮かべた直後に銃声と共にからくり人形のように倒れるディートリッヒの姿は感動的である。X27 にあこがれていた若い兵士の「僕は女は殺さない。もう男も殺さない。これが戦争だって？　こんなの虐殺だ！　これが国に仕えることだって？　これが愛国心だって？　これは殺人だ！」という叫びの中に，『間諜 X27』が単なる女スパイの映画ではなく，反戦をテーマの一つにしていることがわかる。メアリは，モラルも国境も生と死すら超越した存在であり，国家や女性のモ

図３　『間諜 X27』の勇ましい M. ディートリッヒ

図４　『間諜 X27』　美女スパイと美男スパイ

図 5　『間諜 X27』　悩殺ポーズをとる M. ディートリッヒ

ラル・コードを越えて生き，死んでいった。命と引き換えに自由にしてやったロシアの美男スパイ X14 は，「次の戦争でまた会おうな」とにやりと笑って逃げ去ったのみなのに，メアリが笑みさえ浮かべて銃殺されていくのは，自分の生き方を貫いた満足感のためである。

『間諜 X27』において，壮烈な，納得のいく死を受け入れたのは女性である。この映画の独自性と強烈な反戦の意図は，男性兵士の名誉の戦死を賞賛しない点にある。

2.『マタ・ハリ』――戦時下の魔女狩りか？　それとも愛の生贄か？

『マタ・ハリ』（1932）は，伝説的踊り子兼女スパイのマタ・ハリ（Mata Hari, 1876–1917）をモデルにしている。マタ・ハリは，現在では女スパイの代名詞である。実在したマタ・ハリは，第一次大戦中，パリの社交界で人気を集めたエキゾチックで官能的なダンサー兼高級娼婦であったが，ドイツの女スパイであったと信じられている。マタ・ハリは，インドネシア生まれと偽ったが正真正銘のオランダ女性である。二児を得た軍人との結婚生活に終止符を打った後，マタ・ハリは異国情緒豊かな踊りを考案し，

豊満な肉体を惜しげもなく観客にさらし，下腹部をくねらせて宝石で隠した大きな乳房を情熱的な踊りで揺さぶり，その官能性によってセックス・アピールの象徴となった。舞台上だけでなく，私生活においても情熱的で官能的であったマタ・ハリは，政治的・社会的影響力をもつ数多くの男性とベッドを共にしたといわれる。

マタ・ハリは様々な国で有力な男性の情婦となったために，戦時下のパリにおいてスパイだと疑われる下地を持っていた。マタ・ハリは，ドイツ側スパイの暗号番号 H21 を持っていたためにフランスの裁判で有罪になった。しかし，H21 に対するスパイの報酬は名目上のものであり，娼婦の報酬を公金によって支払おうとしたドイツ軍高官の方策にすぎず，起訴の法的証拠は裏付けを欠き，でっちあげであるのは明らかであるにもかかわらず，マタ・ハリはスパイのかどで有罪になり，銃殺刑に処せられた（ハットン 31–34）。ハットンは，マタ・ハリが無実であるのに処刑された理由をフランス軍最高司令部のメンツを保つためだと考える。フランス陸軍は当時多数の死傷者を出し，無能な将軍たちのために多くの忠実な兵士の命が奪われ，軍内部で反乱が相次いで起こり，全フランス軍にまで広がる恐れがあった現実を回避するために，そしてフランス軍最高司令部は将軍たちの責任回避のための生贄として軍の怒りと恨みをドイツに転嫁させるためにマタ・ハリを利用したと指摘する（35）。ハットンの指摘が正しければ，マタ・ハリは冤罪によって処刑されたことになり，中世の魔女狩りにも似た普通の女ではないという偏見のために殺されたといえる。

グレタ・ガルボ（Greta Garbo）主演の映画『マタ・ハリ』では，マタ・ハリはスパイとして雇われ，情報収集活動をしたことを認めるが，『間諜 X27』のように組織的プロフェッショナルに徹したスパイとして描かれていない。『マタ・ハリ』の女スパイは，愛してはいけない男に惚れて，平凡な女としての幸福を願ったためにスパイとしての掟に背くこととなり，命を奪われた悲劇のヒロインとされる。

マタ・ハリ伝説を下敷きにしたといわれる『間諜 X27』は，『マタ・ハ

リ』とストーリーはよく似ている。女の魅力によって，ロシアのスパイを殺す使命を与えられながら，本気で愛してしまったために銃殺に処せられるという点は二つの映画に共通する。しかし，二つの映画のトーンは正反対である。ディートリッヒの X27 は，死を恐れることなく死に不敵にも挑戦している。X27 にとって死こそが究極の愛人であり，美男のロシアのスパイは死への案内役である。それに対して，ガルボのマタ・ハリは，ロシアのロザノフ中尉（Lieutenant Alexis Rosanof：ラモン・ノヴァロ Ramón Novarro）を一人の平凡な女として愛し，結婚を夢みる。スパイとしての自分に女としての未来がないことを承知しながら切なく恋し，自分の恋路を嫉妬に狂って妨害しようとした年配の支援者であるロシア陸軍武官シュビン（General Serge Shubin：ライオネル・バリモア Lionel Barrymore）をやむをえず殺害する。ロザノフとの愛に生きたかったマタ・ハリは，死刑宣告を受けて気絶寸前になる。マタ・ハリに命を助けられたロザノフ中尉も『間諜 X27』のロシア人 X14 のようにクールではない。逃走しそこなって失明した後，マタ・ハリの独房を療養所だと信じて訪問し，銃殺されるマタ・ハリに手術室に向かうための一時的別れだと言い聞かされて待つ。ロザノフには治療すれば視力を回復できる未来が与えられ，マタ・ハリには死しかないのは『間諜 X27』と同じである。目が見えないために事実を確認しえない恋人を後に，銃を携えた多くの兵士に囲まれて刑場に向かう毅然としたマタ・ハリの姿はりりしく，神々しい光に包まれている。くすんだ兵士群にあって黒い裳裾のついたドレスを着た長身のガルボは，勝利の女神のようなまばゆい高貴さに満ちている。ディートリッヒとは違って，ガルボは銃に倒れる姿を見せないが，死に際のあっぱれな美しさにおいて二人の女優はりりしい女らしさを競っている。

ガルボとディートリッヒは，たばこをくゆらす姿，愛用のピアノに向かう姿勢において好敵手であることを示すが，洗練度，超越性，説得力においてディートリッヒに利がある。マタ・ハリは，オリエンタリズムにのったエロチシズムを売物にした踊り子であるので，映画の始まりのクレジッ

図６　DVD『マタ・ハリ』の表紙

図７　『マタ・ハリ』　東洋の神秘を踊るグレタ・ガルボ

図８　『マタ・ハリ』の G. ガルボとラモン・ノヴァロ

ト・タイトルと共に東洋風のエキゾチックな音楽が流れる。舞台でシバ(Siva）神に向かって，身をくねらせ，観客を恍惚の渦に巻き込む大柄なガルボのマタ・ハリは，輪郭のはっきりした大型な個性であり，北欧的である。ガルボの踊りは異教の女神に捧げる踊りであっても，インドネシアのシバ神というよりは，ギリシア神話の女神アテナ（Athene）に戦闘の勝利を祈願する女戦士の舞踊のように見える。また，病院ではなく監獄であることがわからない盲目になったロザノフ中尉にマタ・ハリは真実を告げずに，「あなたには，幸福になって，笑って，恋もしてほしい。孫にマタ・ハリは素晴らしい女性だったと嘘であっても言ってくれれば私は満足よ」と泣かせるセリフを述べるが，センチメンタルすぎてりりしいガルボには似合わない。ディートリッヒのように自分の処刑に涙してくれた若い兵士を無言で気遣う方が度量の広さ，勇気と気高さをより雄弁に表現しうる。女優の力量以前に演出において『間諜 X27』が勝っている。

結論

女スパイは「ハニー・トラップ」を多用し，常用する，というイメージは現実においては誤っていることをハットンは以下のように述べる。

> 現代の女スパイたちは実際的であり，冷静で勤勉家である。彼女たちは，陸軍元帥の腕に抱かれて，色じかけでその国の戦時機密をかぎだすという考えを聞いたら吹出すであろう。彼女たちは，セックスが女スパイの持つ必殺の武器であり，マタ・ハリよりずっと巧妙に，その武器を使用しなければならないことを知っているからである（28)。

ハットンの言い方は微妙である。女スパイは「ハニー・トラップ」をみだりに利用することはない，なぜならば切り札はいざという時のためにとっておかなければならないのだから，と暗示しているからである。

「ハニー・トラップ」の利用効率がよいのは，一般に性的誘惑に乗りや

すい男性相手だが，状況によっては女性が相手でも有効である。『007 ジェームズ・ボンド』が女性にもてるプレイ・ボーイという設定である理由の一つは，ジェームズ・ボンドが好男子の方が女性に接近がより容易で，そうでない場合よりも情報収集の成果が上がるからである。ボンドは女性に弱くて，女性がらみで失敗を重ねる男であるとされるが，ボンドとベッドを共にした女性はたいていボンド側に寝返るという点にも注意を向けるべきである。ボンドは，女性のハニー・トラップに負けて失敗する以上に，男性としてのセックス・アピールを武器に女性のハートを獲得して味方につけて危機を脱し，最後には勝利者として帰還を果たしている。皮肉なことに男性であるボンドこそがハニー・トラップ利用の利益者なのである。

それに対して，『間諜 X27』と『マタ・ハリ』は，ハニー・トラップを利用してひとたび勝利をおさめながら，本当に好きな相手のために自分の命まで落としてしまう。現実のマタ・ハリがどのようにどの程度男性を色仕掛けで利用したかは不明だが，映画『マタ・ハリ』のガルボが扮するヒロインは，『間諜 X27』と違って，最愛のロザノフ中尉を自分から率先して誘惑することはなく，現実の恋愛になるといたって受け身である。最初にマタ・ハリに心を奪われて恋を仕掛けたのはロザノフの側だった。ロザノフの一途な愛の深みにはまったマタ・ハリが理性的に愛を拒むくだりは，グレタ・ガルボが後に出演する『椿姫』（*Camille*, 1936）のマルグリット・ゴーチェ（Marguerite Gautie）が恋人アルマン（Armand）のために身を引く場面を彷彿とさせるしとやかさである。ディートリッヒの X27 もスパイとしての失敗を女ゆえと映画は語るが，ディートリッヒの女スパイの方がガルボよりも女性としてのモラルや伝統的生き方の縛りからより自由で挑戦的である。1930 年代当時のアメリカの一般観客には，男に真心をささげ，罪深い生活から足を洗って贖罪のように銃殺刑になるガルボの方が，挑戦的に喜々として傲慢に死んでいくディートリッヒよりも受け入れやすかったに違いない。しかし，現代ではディートリッヒの X27 の主張する生き方が観客の心をつかめる。

大恐慌のただ中の 1930 年代のアメリカは，経済のみならず，政治的に不安定な時代であった。フランクリン・デラノ・ルーズベルト（Franklin Delano Roosevelt, 1882–1932）が大統領に当選するための演説「忘れられた人」（“The Forgotten Man,” 1932）を大衆に向かって発した前の年（1931）とその年（1932）に制作されたこの二本の映画は，アメリカのそして世界的不安を濃厚に反映した色調と内容になっている。モノクロ映画の影と光を強調した映像は，これまでの世界への失望と未来へのそこはかとない希望を託した光のイメージが投影される。ディートリッヒの奥歯を抜くことによって作りだされたという陰影のある頬骨のくぼんだ顔，モノクロの画面に映える彫りの深いガルボの顔は，1930 年代の陰りのある世相が光を求めた結果生み出した美女の典型だと解釈される。二つの映画は，内容的にも普通の娘や妻といった一般社会に認可された昼間の光を浴びる存在から娼婦でスパイという闇のヒロインを扱うことによって，人々の暗い，なげやりな気分を反映し，認知する内容を含む。妖艶な女スパイの活躍がもてはやされたのは，1930 年代の権力中枢にいるのが男性だったからであり，その男性陣から効率よく情報を引き出すのにはハニー・トラップを仕掛ける有能なスパイにして娼婦がうってつけだからである。さらに，1930 年代のハリウッドで第一次世界大戦の時代背景を持つ「スパイもの」が多く作られた背景には，ドイツのナチス政権の誕生（1933）を控えて，第二次世界大戦に突入していく軍事的にも不穏な不気味な気配が漂う世界情勢が緊迫の方向に向かい，敵国の情報を探るためのスパイの重要性をことさらに意識しだしたためでもある。

1930 年代は，ドイツ，イタリア，日本ではすべてのものを国家の統制下に置こうとする独裁や専制政治が横行し，他のヨーロッパ諸国でも国の利益第一の帝国主義が闊歩した時代であった。アメリカにおいても大衆，民衆などの姿のない塊の名を語る個人は他国よりは尊重されていたが，全体を優先させる政策がとられ，全体主義への傾倒が一部で懸念された（モリソン Morison 47）時代である。アメリカはファシズム（Fascism）か，ナチ

ズム（Nazism）の二つのイデオロギーのどちらかによってしか救われないと考える人々も存在し（モリソン 52），新聞社は「隠れたファシストとして［ル］ーズベルト大統領を，『資本主義の臨終のあえぎ』としてニュー・ディールを，攻撃しつづけた」（モリソン 54，［　］は筆者）。そのような時代にあって，いやそういう時代だったからこそ，二つの映画は，個の重要性と個人の幸福追求の権利を追求し，自由に命をかけたヒロインに畏敬の念を表すのである。アドルフ・ヒットラー（Adolf Hitler）の台頭に悩まされ，第二次世界大戦への足音が響き出した欧州諸国とは違って，不況に苦しんでもファシズムとの距離を保てたアメリカだったからこそ，このような反戦映画制作が可能であった。特に『間諜 X27』においては，主演女優も監督も共に反ナチス体制の人であった。主演女優のディートリッヒは，プロイセン王国近衛警察士官の娘としてベルリンに生まれたが，ナチスを嫌ってアメリカに渡ってきた。ディートリッヒとの名コンビで有名な監督ジョセフ・フォン・スタンバーグ（Josef von Stemberg）は，オーストリア・ハンガリー帝国時代のウィーンにドイツのユダヤ系として生まれ，7 歳の時にアメリカに移住した経歴から国家権力によって個人の生命と自由を奪われることに大きな危惧の念を持っていたことは想像に難くない。

この二つのハリウッド映画は，国の利益よりも個人の幸福を優先して命を捧げた女性の勇気と気高さに拍手を送るスクリーンの背後の作り手たちの視点ゆえに，時代を超越する映画として不動の評価を可能にする。スパイは情報を秘密裡に収集してしかるべき筋に流すことが使命であるが，平和に見える 21 世紀の日本でも情報の漏洩と管理は情報機器の発達したネット社会においてますます大きな問題を投げかける。最近では「特定秘密保護法」の成立によって国家権力による情報管理と隠蔽を警戒する人々もいる。その意味で 1930 年代女スパイ映画が主張する個人の権利の持つ意味合いは過去の遺物ではない。

『間諜 X27』と『マタ・ハリ』の最大の魅力は，暗い時代の風潮を色濃く反映しながら全体主義の好戦的流れに沿わない自由な魂と弱者であった

女性の反骨精神を示した点である。ディートリッヒとガルボが観客に向かって仕掛けるハニー・トラップとは，妖艶な美貌にくるまれてはいるが時代に流されない，個の尊厳と幸福を主張する自由で気高く気骨のある精神である。

文献：

海野弘『スパイの世界史』，栗原勝訳，文藝春秋，2003 年。

ハットン，J. バーナード（Hutton, J. Bernard）『女スパイ―歴史の陰のヒロインたち』（*Women Spies*），リーダーズ・ダイジェスト，1972 年。

モリソン・サムエル（Morison, Samuel Eliot）西川正身翻訳監修『アメリカの歴史 5：ニューディール―ケネディの死　1933–1963 年』（*The Oxford History of the American People,* 1965），集英社，1997 年。

DVD：

『マタ・ハリ』（*Mata Hari*）．監督：ジョージ・フィツモーリス，出演：グレタ・ガルボ，ラモン・ノヴァロ，ライオネル・バリモア，1932 年，DVD ワーナー・ホーム・ビデオ，2005 年。

『間諜 X27』（*Dishonored*）．監督：ジョセフ・V. スタンバーグ，出演：マレーネ・ディートリッヒ，ヴィクター・マクラグレン，1931 年，DVD ジュネス企画，2007 年。

図：

実在のマタ・ハリ

図 1 and 図 2　“Mata Hari wearing a Javanese-inspired costume” *Encyclopædia Britannica.* <http://www.britannica.com/EBchecked/topic/368879/Mata-Hari>. 20 Dec. 2013.

マレーネ・ディートリッヒの『間諜 X27』

図 3 ～図 5　写真協力　公益財団法人川喜多記念映画文化財団。

グレタ・ガルボの『マタ・ハリ』

図 6　DVD『マタ・ハリ』の表紙　ワーナー・ホーム・ビデオ，2005。

図 7　*Movie Icons GARBO*. www.taschen.com. 2007. p122.
図 8　写真協力　公益財団法人川喜多記念映画文化財団。

Synopsis

Female Spy Films of the 1930s: The Effectiveness of the "Honey Trap" in *Dishonored* and *Mata Hari*

Junko Shimizu

"Spy" is a person whose job involves secretly gathering and reporting information about another country, organization, group, or enemies without the consent of the information-holders. Espionage is a set of clandestine and constitutional activities carried out for government or commercial purposes. Yet, as a matter of course, spying is illegal and is punishable by law. Thus, espionage is almost always accompanied by danger; it is unavoidable that some risks will be run in this kind of work. In a word, spying is a mission that may jeopardize one's life. The duties of a spy are required most in wartime. During the 20th century, when many wars occurred, there was much demand for spying and espionage: the governments of many countries needed able spies, especially for military purposes.

In the film world, spy films have always been quite popular because of their entertaining qualities: they contain thrilling action, suspense, and the seduction of beautiful women. Among countless spy films, the most popular is the *007* series, which premiered in 1964. *007* focuses on a British gentleman spy called James Bond. Although it is difficult to find female spy movies that can rank with the *007* series, the classic *Mata Hari* might just be a match for *007*. It is said that beauty and charm are the merits of

the female spy, while the man she seeks is at the center of power and holds confidential information. Through the so-called "honey trap"—the use of a seductive woman to tempt a man into passing highly classified information to her government or syndicate—female spies play an active role in the 1930s film world. Among several 1930s female spy films, this paper focuses on *Dishonored* and *Mata Hari*. I will examine the universal themes that these two movies encompass: the anxiety of excessive information management; concealment through the power of the government; and the importance of personal dignity, rights, and happiness.